

1 研究主題


「個別最適な学び」及び「協働的な学び」の充実に向けた1人1台端末の活用の工夫
～「子供が学ぶ授業」の創造を目指して～

2 研究の具体


通常学級に在籍する特別な支援を要する児童や、外国にルーツを持つ児童など、実態は実に多様となっている。子供一人一人に応じた学びとなるよう、昨年度からICTを効果的に活用する研究を進める中で、個々に使い方を工夫する子供の姿が見られるようになった。そこで本年度は、「個別最適な学び」及び「協働的な学び」に焦点を当て、教師主導の授業から、子供一人一人が問題発見をし、主体的に学ぶことができる授業を目指している。また、業務改善に向けた校務DX化を進めている。

視点1 個別最適な学び・協働的な学びの一体的な充実に向けた授業づくり

(1) 児童主体の問題発見・解決学習




問いを見出し、解決する手立て
⇒子供が考え、実行できるように環境を整える(子供の知りたいを大切に)。




自己調整する力の育成
⇒単元計画表を基に、学びを調整する。

(2) ICTの活用




動画で動きの確認
⇒言葉の意味理解につながる

様々なツールやアプリの活用
⇒その場で多様な情報に触れることができる。




思考の共有
⇒教師が適切に見取り、支援につなげる


(3) 環境の工夫



ICTとアナログ
⇒学びに合わせて選択できるようにする。



机の配置
⇒教師に向けるのではなく、子供同士が向き合う。



学習の流れの掲示
⇒子供が適宜見返すことができる。

視点2 校務DX化

- 汎用的なソフトウェアとクラウド環境の活用
- 働き方改革・時間の有効活用
- 職員間の情報共有

冊子のデジタル化

共同編集

の充実

チャットを活用した情報共有

多度津小学校ポータルサイトの活用

3 研究の検証及び改善の手立て

- 子供の問いを主体にした授業や、自己選択・自己調整する場面を取り入れたことで、子供が主体的に学びに向かう姿が多くみられた。
- ICTの日常化が進み、文房具的役割となり、使うことが当たり前の状況になっている。
- 必要感のある協働場面が少なかった。問のたせ方や、子供の学び方を鍛えることで、交流する価値に子供自身が気づけるようにする。
- 子供に委ねる授業にチャレンジしているか」という教員へのアンケートで71.4%が「できていない」「あまりできていない」という結果となり、教員間で意識差がある。